

子どもの生きがい

小宮 晶子

子どもが生きがいを意識するかどうかは別として、もし、それを感じる時があるとすれば、子どもがここにこしている時だろうか。

以前、重度心身障害児の施設を見学した時、その先生が、淡々とお話して下さったが、その中で、すべてが閉ざされているような子どもたちにも、生きるよろこびを得させたいといふ切なる願いを、「子どもたちが笑ってくれたら」ということばでいい表わされたのに、深い感動を憶えたことがあった。

また、子どもは生まれて二カ月くらいたつと、はじめて母親の視線に目で答えて、にこっと笑うようになるが、私もその笑顔を見たとき、幼子の魂にふれる思いがして、子どもを育てる喜びも、重みをも感じさせられたが、子どもの笑顔には、そばにいる者にまで、生きがいを感^じさせる息吹^いきがある。

子どもの笑顔は、子どもが生きるという本質的なことに、深くかかわっていることなのであろう。

不安感

子どもが笑顔を見せる時とは反対に、子どもが不安を感じている時は、生きるよろこびを見いだすのに、ほど遠い状態ではないだろうか。身近に経験したことを一例にお話してみよう。

以前、ちょうど引越して来たばかりの夏、環境が変化したせいもあり、またその年は雷がことに激しかったということもあって、当時一歳半の女の子が、雷恐怖症とでもいえるような状態になってしまった。この年代の子どもは、ささいなことでも情緒不安定になることがあるようだが、生まれた時から順調に発育していたこの子も、次第に、雷だけでなく、飛行機の音、花火の音、遠くの車の音、ちよつとした物音ですら、「こわいこわい」と泣き叫んで、しがみつくようになった。一日中緊張して泣いてばかり、寝つきが悪く、食事も進まず、笑うこともなくなり、すっかりやせてしまった。安定感を失なうと、子どもはどんなに生き生きした活動と、よろこびの表情を失なってしまうかを教えられた出来事だった。

少し大きくなった子どもでも、不安を感じる時は少なくない。ある幼稚園児は、いつも近くの二人の友だちと幼稚園に行くのだが、朝二人の友だち手をつなぐより先に、その子がどちらか一方の友だちと、パッと手をつないでしまうと、その日は元気に楽しく遊べるという話を聞いた。子どもは頼るべきよりどころを求めている。幼い子は、母親にくっついていて安心して安心する。そしてだんだん友だちと仲良くすることに、安心感を見つけることもできるようになる。不安がしつかり受けとめられ、頼るものを得て心に安定感があれば、子どもは自分の力を存分に発揮して生活でき、満足感を味わうことができるうだ。

楽しい経験のくり返し

二歳の男の子が少し前まで「ごちまあま」と、まわらぬ口でごちそうさまを唱えていたが、そのたびに、「私が小さい時はどう言ったの?」「私は?」と、上の子が聞く。「おっちゃんまよ」「Aちゃんは、おちちようちやまでいた」だったわ」と答えると、もういかにもうれしそうに笑い出す。自分の小さい時の声を聞いたり、写真を見るのが好きである。また、抱かれたり、あやされる赤ちゃんの時の話や、とても楽しかった時の話を何度も聞きたがる。自分が大事にされ、愛情を注が

れてきたことを感ずるのであろう。「Kちゃんはね……」「Aちゃんはね……」と言って、子どもたちに話していると、子どもが、ごはんを食べなくて困ったことでも、泣き虫だったことでも、その当時は親の方もいら立ち、疲れた気持ちになったものなのに、子どもにとっても、おもしろく楽しい思い出となってしまうから不思議である。

次から次に関心が移り、前のことなどすっかり忘れてしまうのも子どもの姿である一面、「もう一べん!!」と、くり返しくり返し楽しむのも子どもの姿である。「ねんねん……よ」の何のへんてつもない子守歌など、今でも魅力があるようだ。子どもを暖かくつつむ幸福感は、このような、ごく幼い時の情緒に訴える快さに根ざしているのではないだろうか。

生活のリズム

活動する時と眠る時、大人も子どもも、この規則正しいリズムが必要だということに変わりはないが、子どもには活動する時とともに、眠っている時も成長している時だという点で、大人とはちがう。眠ることは、この意味で子どもの成長にかかわりをもっている。

また、快い眠りと、心を落ち着かせる静かなひとときは、子どもの生命を生きかえらせる。眠りが足りない時や緊張が続く時、

子どもはいら立ち、持てる力を発揮するどころではなく、混乱してしまふ。躍動の時と静かな時のリズムをよく保つことによつて、子どもは生き生きとした生命をたたえていることができるだろう。

なにげない草花が、思いもかけないくらいに、土深く根を張っているのに驚き、子どもの成長のために、根を培うことがいかに大切かを、教えられたような気がした時があったが、頼るべきものが与えられている心の安定感や、幼い時の思い出につながる暖かい幸福感、生活のリズムの中から生まれてくる生命のみなぎりは、子どもがよろこびに満ちて生活するための根を培うこととなるのではないだろうか。

自由な気分

あめ あめ もっとふれ ふれ
砂場もないようになってしまえ

あめ あめ もっとふれ ふれ
おうちも見えなくなつてしまつていいよ

あめ あめ もっとふれ ふれ
びしょびしょになつてしまつていいよ

あめ あめ もっとふれ ふれ
そしたらみんながおどろくよ

以前、五歳の女の子が、ベランダのドアを開けて外を見ながら、即興でうたを口ずさむのを聞いたことがある。絶え間なく降り落ちる雨に見とれていると、その中に没頭してしまうということはよくあるが、こんななにげないひとときに、子どもの心をびやかに、くつたくなくさせる、秘密があるのかもしれない。とらわれない自由な気分の時、子どもの心が未知なるものに向かつて開かれ、新鮮な目で、驚きの目で、世界を見渡すことができるようだ。雨の降るさまにリズムを感じ、どこもかしても大雨にうずまつてしまうような情景が、生き生きと見え来たのだろう。

それに比べ、大人は何も見ずに、寒いからと戸を閉めてしまふように、子どものまわりに無用の壁を築いてしまうことがなると多いだろう。自由な気分の時、自由な発想があり、常識的でない独自の活動が生まれて来る。

こんな例がある。

「ピクニックに行くんだから大きな紙をちょうだい、だつて敷くものがあるのよ」と四歳の女の子が来たので、包み紙を与えると、ピクニックごっこをしていたが、そのうちに、紙のま

わりを積木でかこみ、おうちごっこになった。しばらくして、そばで弟が絵を描いているのにつられて、先の大きな紙一ぱいに歩いている人と自動車を描き出した。描いているうちに、「雨が降っているの」と、傘を描く。「おもしろいわね」と言ってお母親が見ていると、せっかきれいにぬった洋服の上にわいと黒い色をぬってしまった。「あらせっかきれいな洋服なのに」と思わずびっくりして声を出してしまうと、「レインコートを着ているんだもん」「自動車にもこういうのかけるでしょ」と言った。しばらくしたら、絵を描いた大きな紙を半分にたたんで、その中に人形をねかせ、ふとんにして遊んでいた。

一枚の包み紙がシートになり、床になり、絵を描く紙となる。そして絵を描くと、せっかきれいに描いた洋服に、レインコートを着せて見えなくしてしまう。またその絵を描いた紙が今度ふとんになるといふうちに、次々に思い通りに変えられていくことは、子どもの内なる世界の拡がりを示している。

子どもは想像の世界にひたりながら、思うさま物を操作して楽しむことができるようだ。

自発的にする

二歳の男の子は、このごろトイレに行く時に、電気をつけたり消すこと、戸を開け閉めして用を足すこと、蛇口をひねって

手を洗うことを自分一人でやりたがる。新聞を戸口のポストからとってくることも、うっかり手を出すと、泣き出すほどで、自分でもう一度戻してからやり直す。そして得意顔である。自分の力で、自発的にやるのが非常なよろこびになっていることがわかる。自発的にすることが興味を増し、さらにそれが自発性を促しているようであるが、そのくり返しの中で、子どもは成長の過程にあるとびらを自ら開くよろこびを、体得していくのではないだろうか。

熱中する時

ままごとのピンを両手に持って、ビーズの玉をあっちに入れたり、こっちに入れたりしている。時々振ったり、のぞいたり、長いことくり返している姿がある。見てみると、何がそんなふうにあるの子の心をとらえるのであろうと、その子になってみたような気にさえる。時には、「できない!!できない!!」とつぶやきながら、穴に糸を通そうと懸命になっている姿もある。穴に糸を通すことが、子どもにはそれほど価値あることなのかと、あらためて感心させられる。静かだと思っていると、部屋のすみでブロックで何か作っていたり、絵本に見入っている姿も見つける。何を感じているのかはつきりとはわからないが、だまって集中して楽しんでいる。声を上げ、笑い声を上げ、歌

いながら、心おどらせて水あそびなどに熱中している子どもの姿もある。

子どもが身も心も投入して活動する時は、子どもは新しいことを発見したり、驚いたり心を躍らせて自分の世界を広げることができると。自分にとって価値があると思う目標に達するためには、注意力を集中させ、エネルギーを注がねばならないことも体得する。そこに子どもの成長がある。子どもの生きるよるこびは、この成長を実感することと言えよう。

感動する時

「みなしごハッチ」というテレビ番組の大ファンであった、当時四歳の女の子は、小さい時から悲しい場面で涙ぐんだり、絵本でも、ピノキオがサメにのみ込まれるところなど魚の絵をたいてわーわー泣いたりするようなところのある子だった。この「みなしごハッチ」も、この子の心情に訴えるところが多かったと見え、毎回、「ひどい!!」「かわいそー」「よかった!!」など声を出して、心から共感していた。主人公の出会い出来事を、自分が身代りになって経験できる物語の世界が、生きるよるこびにあふれていれば、子どもの心にも生きるよるこびを与えてくれるであろう。ハッチがお母さんに会えた時のよるこびは、そのままこの子のよるこびとなったようだ。しばらく

して「ハッチの絵本」というのを作った。絵だけ描いて来て、話の方は、子どもがしゃべったのをそのまま母親が書きとめたもので、必ずしも筋書きはテレビの通りではないが、子どもの感動が表われていると思われるものの何枚かを紹介しよう。

④ ハッチとママは、とつともうれいしなみだが出て来ました。それは、ママとハッチと会えたからです。ハッチはママにいいました。「ママとボクははなればなれになったでしょ、こんどパパに会えるでしょ」

⑤ アーヤはママに言いました。「ママ、ハッチはどこにいるの」「おうちにいるわよ」「あーよかった。いまなにしているの」「ねてるわよ」「おこしてもいい」「いいえだめですよ」

⑥ とうとうハッチとパパが会えました。パパはハッチに言いました。「ハッチはいい子だね、みつをくんですぐごはんにしようか」「もうちょっとあとがいいな」「さきにごはんたべたほうがいいよ」

⑦ みんなごはんたべて「おいしいね、みつのごはんておいしいねママ」おわり

稚拙なものでも、表現活動にまで高められたよるこびの感動は、子どもの心の中でどんなに深いものだったことかと思われる。感動の体験は、子どもの心の世界に、何かを十分に得たと

いう満足感を与える。それこそ子どもの生きがいであり、成長のかかるとなるだろう。

成しとげる時

同じ子が幼稚園に入園して、一学期の半分は、「鉄棒して来たの」と答える毎日であった。さか上がりができるようになりたくて、帰ってからアパートの鉄棒にとんで行ってやっていった。ちよつとこわがりのところもあつてなかなかできなかったが、とうとう一人でやれるようになって、「ママ!!」と叫びながらかけ込んで来た時のよろこびよりは、まさに子どもが生きるよろこびを感じた時ではないかと思ひ出される。子どもが自分の心身の成長を実感としてかみしめることができる時、それが生きるよろこびと言えるのではないだろうか。

困難をのり越える時

子どもでも時には思いがけない力を示すことがある。同じ女の子が夏休み後、手の指先のあちこちにできた小さないぼの治療に、三十回ほど病院に通い、腕と指のいぼの一つ一つに注射をして治してもらった。指先にするのは痛いからと、先生の方がためらわれたが、毎回、看護婦さんや先生にはめられるのがうれしく、一度も泣かずに通った。ほめられることが困難をの

り越える力を子どもに与え、また頑張り通したことが、子どもの心にしっかりと自信を与えたようだ。

子どもの日常生活の中にも、がまんしたり、いやでもしなければならぬことがある。理解を越えたことにぶつかつておそれを抱くこともある。けれど、遊びの中でも、適当な抵抗感や緊張感を味わえることがあると、一層意欲をかき立てられ、よろこびも大きくなるという場合もあるように、子どもは、さまざまな困難をのり越える体験をしながら、真に人格的に成長していくのではないだろうか。

おわりに

子どもの生きがいは、子どもが自分の内なるものの成長を、実感するところにあるようだ、思いつくままにのべて来た。子どもが喜々として活動している時ばかりでなく、泣いていても、おこつていても、困っている時でも、眠っている時でさえ、子どもが成長している過程の一コマと考えると、子どもは必然的に生きがいを持っている存在なのだと言えるかもしれない。母親が幼い子どもを育てている時、一番生きがいがあると言うのも、日々子どもの成長にふれるからなのだとしみじみ思う。子どもがしっかりと根を張り、ぐんぐん伸びていくのを願ひながら、子どもと過ごす時間を大切にしたいと思った。